

人を人と思わぬ狂った思想に染まつた手記を読み終えた貴方は、気付けば額と背中が冷たい汗にびっしょりと濡れていた感覚に気づき、ぐくりと唾を飲み込んだ。

仔山羊

「ん マスター、

……どうかしたんですか？何か、様子がおかしくなったように感じるんですけど？」

再び山羊の蹄のイヤリ／ガを舐めながら、少女が貴方の顎を覗き込む。

耳にかけた山羊の蹄のイヤリングを揺らしながら、少女が貴方の顔を覗き込む。仕草こそ愛らしいものだが……この少女は、貴方をこの手記の人間と勘違いしているのだろう。

しきりにはシヨニスと単に事や母親への嘆願について語っていたのは恐らく彼女をあの場所に招いた……呪文とでもいうべき言葉の中に、そういういた意味合いが含まれていたのだと察せられる。ようやく、何故あんな化け物がいたのか。

……そして、そんな化け物と対抗出来る貴方から精を搾り取つた少女が何故現れたのか。その真実を知つてしまつた貴方は、これから先どうすべきなのかを考え、頭を抱えた。

「マスター……？」
しつかりして下さい！そんな調子では私がショゴスより優秀とお見せ出来なくなります！
ちやんと見ていて、判断して貰わないと困るんです！」

貴方の苦惱の理由に気付いた様子もなく、黒い仔山羊である少女は、腰に手あてムスッと頬を膨らませた。

あの化け物、ショゴスを倒せばこの事態は全て収まるのだろうか……？
そんな、どうしたらいいのかはつきりと分からぬ事に頭を悩ませながら、改めて少女の様子を伺
おうとして……窓の外から漏れ聞こえてくる、小さく不気味な音に貴方は気付いた。

ショゴス

“い”あ”……い”あ”……ないあー……てえふ、てげえー……い”あ”ー……！

その音に導かれるように貴方が視線を窓へと向けると、声の響いてきた窓のガラス一面に、緑色の粘液が張り付いているのを貴方は見てしまう。

——ああつ、窓に……窓につ！――

《がしやああんつ！！》 （窓の割れる音）

ショゴス

《でけえりいりいいいいいいいつつ！！！！》

「つ！？マスター！！私の後ろにつ！！」

『がばつ……だんつ！』

(“貴方”を庇い、マスターの前に躍り出る仔山羊の音)

ショゴス
『でけえ……り、りいい……つー！！』

少女の鋭い叫びがあがつた瞬間窓は割れ、ガラス片を散らばらせながら部屋の中に名状し難い緑色の……いや、僅かに玉虫色が混ざるような体色に変化した粘液の化け物、ショゴスが侵入してくれる。

仔山羊

「めええ……！部屋の様子から、入って来れないのかと思っていたんですけど。
そうでもなかつたみたいですね……！」

ショゴス

『でけえ……ちがあう……。はいれな、がつだあ……。

で、も……脳、つかえば……呪文使えば、ちがあううう……でえ、けええええ』

威嚇するよう鳴き声をあげながら、少女が貴方の前へと躍り出て、舌打ちするように言葉を吐き出す。
その瞬間……酷く耳障りな、ぼ～ぼ～と泡立つような不快な声が、返事を返した。

仔山羊

「……今、言葉を？
ショゴス等という下等な奉仕種族の癖に、言語を操る知能があつたのですか？」

ショゴス

『でげええ……ひど、だべだあ……いつぱい、だべだあ。

体のづくりい、……脳、使い方……知つた。てけええ……』

ぐちゅり、ごぼり……凡そ自分の重さを支えるという言葉すら知らないような粘液の体が、物理学の方程式に逆らうかのように逆巻きに盛り上がる。

ショゴスは人の形……そう表現するには余りに不恰好で不快極まるものではあつたが、四肢を携えた人のような形へと姿を変えていく。

『ぐじゅりぐじゅり……』

(粘液質な音を立てながらショゴスが変形する音)

ショゴス

『人、食つたあ……脳、魔術……神々への願いの仕方、知つた。
おで、お前と争う……つもりない、人間おいてけば、それでいい……おで、もつと知恵つけるう……
でげえりい』

玉虫色がかつた緑色の粘液の化け物は、体だけは人のような姿へと完全に変形を遂げた。
だが、全身の粘液が口や目のような部分を作り、絶えずぼとぼと自身と同じ色の粘液を垂れ流している様は、人に似た形を取つたからこそ余計におぞましく、より一層、生理的な嫌悪感を

貴方に与えるのであつた。

人でなかつた化け物が、人のような姿で言葉を使う事に恐怖する貴方を他所に、少女と化け物の会話が繰り広げられていく。

仔山羊

「奉仕種族風情が生意気を……そもそも私の契約は貴方の打倒です。腹立たしい嘆願ではありましたが、お母様が認めた以上、それに応えるのが仔たる私の役目！それを違(タガ)えるなど、あり得ないのです！」

三三

『それ、ちがう……人間おでが勝（たらお前をおでに食わせる）もりいおで、お前と戦う……疲れる思つた。やりあうだけ、損する……もし負けたら、おで死ぬ……やだ』

「河を言つて」
アヌナリ?

奴のいう事は本当ですか？私を……あの不快な粘液の中に叩き込むつもりなんですか！？

ショゴスの言葉に、少女がうろん気な瞳を貴方に向ける。
手記の人物はそのつもりであつたかもしれないが、貴方はそもそも巻き込まれただけの立場だ。
無論、そんなつもりはないと必死に首を横に振ると、貴方をじつと見ていた少女が小さく頷いた。

任山羊

まあ、もしそうだとしたら……お母様と私を侮つた報いを、マスターには受けてもうつもりです
が。

三

仔山羊

《ふうん……がきんつ》
《仔山羊の振るつた髪が、ショゴスの障壁にぶつかり弾かれる音》

仔山羊

「つ！？」「これは……被害を逸らす障壁の嘆願？おのれ、奉仕種族風情が生意気な……つ！？」

ショゴスの人の絶叫にも似た怖気の走る叫びと共に、粘液質の体が淡く光を放つ。

それを遮らんと振るわれた、山羊の蹄の形に黒髪を変えた少女の攻撃が、粘液質な体に触れる
と思った瞬間、がきんという硬いものにぶつかるような音が響き、弾かれる。
先ほどは確かに通じていたはずの攻撃が、今は……体を覆うように淡く光る燐光に遮られ、ショ
ゴスに届かない。

人、脳、食う！脳、教える！おで、覚える！神々知る！！
おで、強いつ！てえけえりいーーつつ》

仔山羊

千匹の仔を孕みし森の黒山羊の娘たる私に対して、よくもこんな不遜な真似を……許せないで
すっ!!」

《ぎん》がきん、ぎん《》

10

《てーけえ！てけえりりいつつつ！
にやる・しゅたん！にやる・がしゃんな！にやる・しゅたん！にやる・がしゃんな！……て
けえええ！！》

何度も少女は髪を、蹄、角、或いは純粹に巨大な塊の形に変え振るい続けるが、どうしても後一歩という所で、それが粘液質の体を貫くまでに至らず止まってしまう。

ショゴスはそれを見て、泡立つ粘液を纏わせた不快極まる嘲笑の叫び声を上げ、貴方には理解出来ぬ言葉を紡ぎ続ける。

（髪の一部がショゴスにつかまれる音）

ショゴス

《つーか、まえたあ……食う。食う…………！》

仔山羊

私の体は、お前のようなものが触れていいものではないのですっ！！！放せ！放しなう……あ、ぐつ……きやあああっ！？」

《じゅうううう……》
(捕らえられた髪が、ショゴスの中で溶けていく音)

幾度も燐光に攻撃を阻まれたために、憤(イキドオ)った少女が放つた一撃が、一際大きな音を立て見えざる障壁を叩く。

て見えざる障壁を叩く。その瞬間、障壁に食い込

び……それを粘液の中へと取り込んでしまう。
そして、じゅう、という酸が何かを焼き溶かすような音と共に、少女の苦痛の悲鳴が部屋中に広がった。

ショゴス

《てけええ……つ！－神の子……美味、美味つ！
もつと、もつと食べる……食うう！－けりいい－ーつ！》

仔山羊

「放せ……ぐう、放すですつ！？

こんな、奉仕種族風情が、うぐ……ぐう、あ……ああつつ！？」

《ぐちゅる……する、する》

(取り込まれた髪から、仔山羊が少しずつショゴスに向かつて引っ張られていく音)

（するすると、ショゴスに取り込まれていく髪の量を増え、少女が引き釣り込まれていく。
必死に抵抗しようと、少女は残った髪で床を刺し体を固定しようとすると、先ほどの一撃に大部
分の髪を使つてしまつたために。
徐々に徐々に、抵抗虚しく不快な玉虫色を放つ緑の粘液へと体を引き寄せられていつてしまう。

仔山羊

「あぐつ……！うう……ぐうつ！

こんな、こんなはず……私が、負けるなんて……そんなはずないですつ！ない……のにつ！
お母様に、任されたというのに、こんな……うつ、あぐ……いやああつ！
うつ……、ごめ……なき、おかあさ……まつ。ごめなさ……ますたあ。

……つ！にげ……て……つ！」

今まで母親の名を出し強気に振舞つていた少女が、小さく嗚咽を漏らした。
信じられないと唇を強く噛み締めながら必死の抵抗をしながら……それも叶わないと悟ると、
懺悔するように瞳を瞑り、ほんの一瞬、許しを請うように母の名を。
そして小さく、貴方に向かい謝るような、小さな声が漏れ出ていた。

《きゅつ……！がしやんつ、どぼどぼ……！》

(貴方が、手記にあつたガソリン缶を引っ張り出し、ショゴスに向かつて投げる音)

ショゴス

《てけえ……！？人間……？》

突然の状況に金縛りにあつたように動けなくなつていた貴方は、その少女の囁きに我に返り、あの
手記に書かれていた、机の脇の大きな缶を取り出すとショゴス目掛けて放り投げた。
投げられたソレはショゴスに当たる事はなかつたが、近くの床へと落ち、中からどぼどぼと液体を撒
き散らす。
そしてそれは、独特な鼻を突く香りを放ちながら、ショゴスの周囲に広がつていく。

——その子を放せ、この……つ、ねちよねちよの化け物があつ！

《カチツ、シュツ……ボツ、》おおおおおおおつーーー》

(テイタリに火を^スけ
撒いた灯油^スと投げる音)

ライターー」と、火をショゴスに向けて放る貴方。瞬間、むせるような匂いが失せ、耳を破壊するかのような爆音と共に、ショゴスを中心とした周囲が炎に包まれる。

火、火……っ！？てけえ、ええええええええ！！？？《

全身に纏わりつく炎の勢いに押され、ぼ、「ぼ」と沸騰するように泡を吐きながら、少女を捕らえている触腕を含め、人のような姿をしていた体はみるみると形を崩していく。

仔山羊 「あつー!?」
でも「れ……あ、マスター!/?」

——手を、早く……！

（きゅ……かは）

ショゴスの力が弱まつたのを見るなり、貴方は逃げ出すべく少女に向けて手を伸ばす。そして、未だしつこく絡みつく粘液から彼女を引き戻すように力を込め、驚きの声をあげる彼女を胸元へと抱きとめる。

「あう……ま、マスターに助けられるなんて……。
うう、こ……こんなのがあるなら最初から言つて下さいです！
むう……あう、恥ずかしい所、見せちやつたです……」

胸元の少女は、貴方に助けられるとは夢にも思つていなかつたのか。恥ずかしいとも、屈辱とも分からぬ顔で顔を赤くさせているようであつた。思わぬ反応に口元が綻びそうになるが、今は兎にも角にも逃げねばならない状況。彼女が手元に戻つたならばと駆け出そうとした瞬間……。

（触手が再び、少女をつかむ音）

ショゴス

《でえげえー……にが、にがさな……てけえええ！
まだ、まだ……死にたくない……のう、食う！もつと知恵……知恵つけるうううつーー！
神の子食えば、もつと、もつと……まだいぎるうううつーー！》

全身をぐずぐずと崩しながらも、ショゴスが最後の抵抗とばかりに再び触手を伸ばし少女を捕らえる。だが、捕らえる端から炎はその粘液質な体を焼いていき、先ほどまでの勢いはもはやない。

仔山羊 「お前のせいでお母様に……スターにも、恥を晒したじやないですか！
いい加減、もう……終わつてしまえです！！」

「お前のせいでお母様は……アターはも
いい加減、もう……終わつてしまえです！」

《ぶんっ……びーんっ、」おおおおお！！」ばさりばさり……》
(再び髪を振るい、ショコラの上に本棚を倒す音+本が落ちる音)

ショゴス
で
げえ

でげえ！？もえ、もえ……たすけええ……！？
こやる・しゅだん！こやる・しやがんなああ……な

てげりいしれいしれいしれい！？？？『

先程の名誉挽回とばかりに、少女が再び黒髪を振るう。その髪はぎつしりと本が詰まつた本棚に絡みつき、引き倒す。

既に溶け落ちていく最中のショゴスはその重みに苦悶の声をあげるが、ばさりばさりと零れ落ち、粘液に混ざりながら燃えていく本と共に、自身の終わりを察してしまった絶望の叫びをあげる。

仔山羊

「これでいいです！」
あれだけ弱つてはいるなら、もう抜け出せないです……一
マスター、今のうちに外へ！！」

少女の声に領き、貴方は彼女の手をとり玄関へと走り出す。
忌まわしき化け物と、化け物を招いた傲慢なる知識の宝庫となつた館の焼け落ちていく……その最後の音を聞きながら。

ショゴス

《でけえ……り……りいいいい……》